

県大・神原教授が語る

新型コロナ

声：高知から

他者思いやる共助力を コロナ禍は「災害と同じ」



「災害と同じ。正しく恐れて、そしてイメージすることが大切です」と話す神原咲子教授（高知市池の県立大学）

買い物や済ませ、消毒液をプッシュ。でも、ちょっと待って。店に入るときは使った？ 新型コロナウイルスの影響でスーパーなどに置いてある消毒液

も、買い出しなどで外出するときはある。神原教授はその際、不特定多数と接する店側の人や他の客のリスクを考えた行動を取るよう訴える。

「お店にはいろんな人が来てウイルスを運んでくる場所だから消毒しよう、というのは自分だけを守る視点。自分が店に持ち込んでいるかもしれないと思

ってほしい」

「不要不急」や「3密」の自粛が求められている私たち。それで

患者が増えて病院の対応能力を超えると、

重篤な人のケアに手が回りづらい。「医療崩壊」を招き得るという点でも、今回のコロナ禍は災害医療の現場によく似ている。

神原教授は、手指をこまめな消毒や、隣人との間隔を適度に空ける「ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）」を意識するよう呼び掛ける。こうした小さな行動の積み重ねが、結果的に現場で最善を尽くす医師や看護師の負担を軽くする



「例えば、直接の交流ができなくても、電話やネットで知人や近所の人と連絡を取り合い、『困りごとはないか』と声を掛け合うことはできる。これは災害対応です。共助力のある高知なら、今回の災害と向き合い、助け合えるはず」

（高知市内）

声を寄せてください



LINEで「高知新聞・新型コロナ ご意見窓口」を友達追加してください。

「今回は長丁場になる。皆が日常生活の中で感染対策を取り入れ

る。皆が日常生活の中で感染対策を取り入れ